essay

「恵まれた大地」

その1　春

広々とした牧草地

士別市上士別　農業

五十嵐　紀子

春です。

どんなに雪の多い年でも、必ず三月の末にはセグロセキレイが姿を見せてくれ、春の到来を知らせてくれます。

陽あたりの良い沢では、雪どけの水音が響き、半年間の眠りから、躍動の季節を予告しています。

毎年変わらずめぐってくる春に、私はこの北の大地の住人になりました。二七年前のことです。

◆　◆　◆

そして、その前年に、夫が一人で建てた小さなブロック作りの牛舎の一角で、新しい生活が始まったのです。

搾乳牛五頭からの出発でした。牧草地もなく原野が広がっていました。私たちは、原野の木を切り、笹を刈り、その笹を焼き、牧草の種を蒔き、牛を放し、彼女たちの蹄で種子と土が混ざり合い、放牧地を作っていきました。（蹄耕法）

毎年一㌶ずつ広がっていく放牧地に、牛たちは幸せを感じてくれました。（そう信じています）

◆　◆　◆

そして、結婚した次の年から、私たちは自分たちの家作りを始めました。私の両親が、牛舎での生活から足を洗う時（？）に、タンスでも買いなさいと持たしてくれたお金（持参金）で、セラミックブロックを購入し、一年目は基礎作り、二年目にブロックを積んで、三年目に屋根をかけ、四年目に床や内壁を作って、牛との同居から解放されました。

牛舎での生活は、決して不便

五十嵐　紀子（いがらし　のりこ）さん

仙台市生まれ
恵泉女学園短期大学　園芸生活学科卒
1977年　新規就農
夫　　広司　51歳
長男　直人　26歳
長女　恵　　23歳
二男　信人　20歳

現在75.2㌶で酪農を中心とした立体農業を展開中。栽培作物：缶詰用トウモロコシ・ビート・カボチャ・ジャガイモ・小豆・小果樹

実習生（後輩）たちと母校で・・・　　真中が私（見ればわかる？）

ではなく、においさえ気にならなければ快適なものでした。牛のお産の時は、ドアー枚開ければ、牛たちの様子がすぐわかるし、普段とは違う物音で、異変にすぐ気づきます。牛たちの深いため息で、一日の終わりを知ることもできました。

また、牛たちの体温が高いため、冬でも寝る時は毛布いらずの暖かさでした。

これぞ牛飼いの醍醐味を感じた四年間でした。

◆　◆　◆

住宅作りは基礎の穴掘りから屋根板張りまで、自分たちでやりました。屋根のトタン張りと電気工事だけはプロにお願いしましたが、他は全て自分たちの手でやりたかったのです。

夫はそれまで家を作ったことはありませんが、実習先の住宅

いろんな人たちがブロックを積んでくれた
―研修宿泊施設建設―

家作り　２年目

建設の際、集合煙突をブロックで作るのを見て、「これなら俺にもできる」と、思ったとか。

そして、不思議なことに、物を作っている時は、こちらから声をかけたワケでもないのに、知らず知らずのうちに人が集まってくるのです。隣り近所の人だったり、通りすがりの獣医さんだったりと様々なのですが、なにより本州からの若者たちが、何人も手伝いに来てくれました。

狭い牛舎の家に寝泊りしながら、彼らは実に楽しそうに穴を掘ったり、柱を立てたりしてくれました。

形が、結果が目に見えてわかる喜びの虜になったのです。知識のない者同士が集まり、図書館から借りてきた本に、頭をくっつけあいながら見入り、試行錯誤を繰りかえしながら建てたこの家は、まさに、どこにもない世界にひとつだけの家なのです。

◆　◆　◆

あれから二三年がすぎ、完成したとは言えない、仮末代のようなこの家にも、二〇〇人を越す実習生が侵食を共にしてくれました。私たち以上に、この農場を通して、彼ら、彼女らの思い出ノートの一ページに加えてもらえた喜びが、私たちの宝です。

そして今年、三人の子供たちの教育も一段落し、これからまた新たな歩みを模索中の私たちですが、まずは、一〇年程前から手がけている研修宿泊施設の建設に本腰を入れようと思っています。

また誰かと思い出つくりをするために・・・。